The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	物語における斎宮のモチーフとその効果 ： 『栄花物語』当子内親王密通記事に関連して
Author(s)	井上, 真衣
Citation	詞林. 2007, 42, p. 17-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67570
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

物語における斎宮のモチーフとその効果

――『栄花物語』当子内親王密通記事に関連して――

井上　真衣

はじめに

斎宮[1]とは、天皇に代わって伊勢神宮に仕える未婚の内親王、または女王をいう。天皇の即位に伴って候補となる内親王（適任がないときは女王）から一人が卜定され[2]、宮中の初斎院・洛外の野宮での足かけ三年の潔斎ののち伊勢に下向し、基本的には天皇の代替わりまでの期間、神に奉仕するものであった。制度的には飛鳥時代に整備されたとされ、南北朝時代に廃絶するまでの六百年以上にわたって存続した。この間、天武朝の大来皇女から後醍醐朝の祥子内親王まで、六十四名の斎宮が卜定されている[3]。また、斎宮あるいは前斎宮が、『伊勢物語』『源氏物語』をはじめとした多くの物語の中に登場している。

本論では歴史上の斎宮たちの事績等を参照しながら、主に、物語中における斎宮（前斎宮）という存在の性格について取り扱う。斎宮は未婚を条件としており、選ばれればやがて京を離れ伊勢へ赴かなければならない。よってそこには必然的に別離があり、それに関わるエピソードが多く描かれることとなる。こうした、登場する人物が斎宮であるがゆえに描かれる特徴的な主題や題材を、本論では「斎宮のモチーフ」と呼び、それについての考察を主眼としていきたい。

ところで、斎宮が登場する物語のひとつに『栄花物語』を挙げることができる。『栄花物語』は何人かの斎宮について、卜定記事や退下後の生活についての記事を記載するが、巻第十二・巻第十三には、三条天皇皇女で三条朝斎宮の当子内親王が退下したのち、そのもとに藤原道雅が通うようになったという記事が見える。記事は次のようなものである。

帰京した当子内親王が母皇后宮とは別の邸にしばらく移っている間に、どうしたことか、藤原道雅が通っているという噂がたった。このことは当子の父、三条院の耳にも届き、斎宮の乳母のはからいであろうと、院はたいそう立腹する。折からの病がさらに悪化すると感じるほどであった。当子は前斎宮、ゆえに必ずしもさほど畏れ多いことではないのだが、院の怒りだけは傍の者がいたたまれなくなるほどのもの、当

子は心を痛め、道雅は当子を訪れることをやめる。恋を絶たれた嘆きをただ歌に託し、当子も我が身の上を嘆いて自ら髪を削いで尼となるのであった。

この記事では、当子と道雅との私通について、「かの在五中将の、『心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ』など詠みたりしも、かやうのことぞかし」と、『伊勢物語』（六十九段）を想起させる記述を、嘆く当子の心情を表現して、「御覧ぜし伊勢の千尋の底の空せ貝恋しくのみ思されて」と、『大和物語』（九十三段）を連想させる記述[4]をする。また、「榊葉」「ゆふしで」「そのかみ」など当子が斎宮であることが強く意識された道雅の和歌[5]を記載し、斎宮女御徽子女王の和歌の引用[6]なども見られる。これら斎宮と関連した記述によって、この記事はどのような性格を有するものになっているのか、本論では、当子内親王が前斎宮であることに注目し、この記事にあらわれる斎宮のモチーフとその効果を検討する。それを以て、物語における斎宮の姿を明らかとする一助としたい。

斎宮についてはすでに史学・文学等の側面から様々な研究がなされているが、中でも文学作品にあらわれる斎宮のモチーフについては、勝亦志織氏にその変遷についての研究がある。氏は斎王の登場する物語を調査する中で、斎宮・斎院を「恋愛の対象として描かれるか、描かれないかの二つ」のパターンに分けているが[7]、物語における斎宮を問題とする場合、このように、恋愛面に焦点を当てることは重要であろう。氏も指摘するとおり、『伊勢物語』『大和物語』にあるような斎宮の密通や悲恋は、物語の多く描くところであった。『栄花物語』当子密通記事についても、そのような斎宮のモチーフがあらわれているといえそうである。しかし、殊更に恋愛面にばかり注目しては、物語における斎宮の姿を多角的に捉えることはできないであろう。

そこで注目されるのは、榎村寛之氏の論考である。氏は律令天皇制祭祀に関わる一連の研究の中で、斎王について「天皇の権威をイデオロギー面から保証する存在である「守護神」への対価行為として、特権的犠牲の役割を担うものであり、その意味において天皇制の荘厳装置的性格を持っている」と述べている[8]。斎宮は、天皇の権威と深く関わる祭祀と結びつく。祭祀を担うことによって、王権[9]と深く関わった存在であると考えられるのである。斎宮という存在について考える上ではこのような点も重要であり、よって物語に登場する斎宮についても、王権との関わりという側面に意識的であることが必要であろう。

これに関して『栄花物語』記事で注目されるのは、当子内親王密通記事に斎宮関連の記述が多いことに加え、三条院の怒りが繰り返し記述され強調されていることである。田中貴子氏はこの密通事件について、「道雅という世俗の男性の力によって、斎宮という天皇家最高の巫女であり誇り高い神妻の神威をみじんに打ち砕く不名誉な意味を持つと意識されて

いた」とするが、[10]斎宮が王権と関わって天皇の権威を支える存在であったとすれば、氏の指摘のように斎宮の神威が傷つくのはもちろんのこと、天皇の権威をも傷つけるものと理解された可能性があるのではないだろうか。それゆえの院の怒りと考えると、三条が自らの斎宮を臣下によって奪われる形として記述される『栄花物語』記事には、少なくとも、『栄花物語』内において三条院の権威にマイナスイメージを付加する効果があると考えることができよう。

このように、「王権と斎宮の関係」という視点で『栄花物語』前斎宮当子内親王密通記事の位置づけを試みることによって、恋愛面のみではない、物語において王権と関わる斎宮の姿の一例が示せるものと考える。

一　物語の中の斎宮と恋

一-一、『大和物語』に見られる斎宮のモチーフ

未婚であることが卜定の条件である以上、現役の斎宮にとって恋愛は禁忌である。よって斎宮を描く場合、決して成就しえない恋、悲恋と呼ばれる恋がモチーフとして特徴的にあらわれる。『栄花物語』当子内親王密通記事では、巻第十二に記載される部分と、巻第十三冒頭に記載される部分とがあり、両部分で記事の様相が異なっているように思われるが、巻第十二では三条院の怒りの記述が繰り返されることで密通のイメージが強くあらわれているのに対し、巻第十三では叶わぬ恋を嘆く藤原道雅の和歌が印象的に配され、歌物語的なつくりになっているとともに、悲恋のイメージが強い。そこで、まずは巻第十三にあらわれる斎宮のモチーフについて、これを斎宮の悲恋のモチーフとして考察していきたい。

斎宮の悲恋が描かれた代表的な作品として、ここでは『大和物語』から、雅子内親王と藤原敦忠の恋愛を挙げて検討する。朱雀朝の斎宮雅子（斎宮のみこ）と敦忠（中納言）の恋を語る段では、雅子の斎宮卜定ゆえに成就しなかった恋が描かれており、「斎宮となること」が恋の障壁となっている。

これもおなじ中納言、斎宮のみこを年ごろよばひたてまつりたまうて、今日明日あひなむとしけるほどに、伊勢の斎宮の御占にあひたまひにけり。「いふかひなくくちをし」と、思ひたまうけり。さてよみて奉りたまひける。

伊勢の海の千尋の浜にひろふとも今はかひなくおもほゆるかな

となむありける。

（九十三段　三一六頁）

本話では、雅子が、恋愛が禁忌であり、また、いつになるかわからない退下のときまでを伊勢で過ごさねばならない斎宮となったことが、敦忠の恋を阻む。「今日明日あひなむとしける」とあるから、ふたりはある程度思いを通わせ合っていたのだろう。とすれば、この斎宮卜定は、雅子にとっても

予期せぬ悲劇だった。斎宮卜定のためにふたりの恋は叶わぬものとなってしまう。主題となるのは、「斎宮」という特殊な存在ゆえの悲恋である。

雅子内親王と藤原敦忠については、『敦忠集』に次のような和歌が残っていることから、実際にも恋愛関係にあったと考えられる。

斎宮の御くだりにこがねのをしを

13おもへどもなををしどりのたちかへりとまるしあらばゆきははなれじ

さい宮とよをへてきこえかはしたまけるはじめのにや

29したにのみながれわたるは冬かはのこほれるみづとわれとなりけり

かへし

30こころからひとやりならぬみづなればながれわたらむこともことわり

斎宮にゐたまうてのちに

116いけころしみをまかせつつちぎりこむむかしを人はいかがわするる

返し

117ちぎりこしことわすれたるものならばとふにつけてもわすれざらまし

雅子内親王が斎宮になる前から卜定にかけて、ふたりは歌のやり取りをしていた。引用した贈答歌は、斎宮卜定、伊勢下向に伴う別れの悲しみを歌ったものである。このように、卜定前にすでに敦忠と恋愛関係にあった雅子について、久徳高文氏は、「貞淑なる聖処女としての斎宮たるにふさわしい条件を具えていたとは言い難い」とした上で、そのような雅子の斎宮卜定には「敦忠との恋を潰そうとする力、敦忠が皇女の婿になることを不利益とする力が、はたらいていた」、「藤原家内部に暗く澱む派閥次元の政治的策謀のあらわれ」であるとする。[11] あるいはそのとおり、政治的な理由からの雅子の斎宮卜定であったのかもしれない。斎宮卜定がふたりの関係を阻んだというよりも、ふたりの関係を阻むべく斎宮卜定が行われたのか。しかし、『大和物語』の世界に限っては、語られるのはあくまでも斎宮卜定が原因となった別離であり、それが卜による選定、いわば神による選定であることが、人の意志では如何ともしがたい障壁としての効果をあげて、より悲しみを誘うものとなっていよう。

さて、こうして一旦途切れたふたりの恋愛関係は、その後どうなったのであろうか。『敦忠集』には、次のような贈答がある。

これはあらぬとなむのたまひける、たれかきこえたまひけるにかあらむ、いせよりかへりたまへるに、れいのとの

121あらたまのとしのわたりをあらためぬむかしながらの

はしとみやせし
宮の御かへり
122 はしばしらむかしながらにありければつくるよもなく
あはれとぞみし

別れを嘆いた恋人たちにとってはある意味で幸いにも、というべきか、雅子は母の喪にあい四年ほどで斎宮を退下した。右は帰京したのちに贈答された歌だが、時を経て変わらぬふたりの想いが述べられたものである。このようにふたりの恋愛関係は復活していたわけだが、注目すべきは、物語がそこまでを語らないという点であろう。斎宮卜定という如何ともしがたい理由でふたりは引き離されたまま、叶わぬ悲恋を描いて閉じられる物語は、「斎宮」を障壁とした悲恋を描きたかったのである。そして、以降の物語にも「斎宮」が恋の障壁となっている例が見られる。

『物語二百番歌合』（後百番歌合　九十三番・右）には、「いせにおはせし時内侍かみに」として、前斎宮の「386からころもみもすそがわにそでぬれぬしめのほかなる人をこふとて」という歌が記載される。この歌は『露宿』が出典のようだが、すでに散佚した物語であるため、詳しい内容を知ることができない。ただ、斎宮になったための悲恋が描かれていたことを想定して間違いはないだろう。

また、『源氏物語』にある朱雀院と秋好中宮（斎宮女御）との贈答にも、斎宮の悲恋のモチーフがみとめられる。賢木巻には「（斎宮は）いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしほたれさせたまひぬ」（賢木　九五頁）とあり、以降にも朱雀院が秋好に想いを寄せていることが語られる。退下後の澪標巻にも「ねむごろに院は思しのたまはせけり」（澪標　三一九頁）と、自らの妃にと望む記述が見られるが、結局秋好は冷泉帝への入内が決まってしまう。その時に祝いの品とともに贈られた歌が「わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき仲と神やいさめし」（絵合　三七〇頁）であった。「わかれ路に添へし小櫛」は、天皇が伊勢に下向する斎宮に櫛を挿す「別れの御櫛」と呼ばれる斎宮発遣儀礼を指しており、これを理由に、神が自分たちの仲を許さなかったのだとしているのである。この歌は『物語二百番歌合』において、先に挙げた歌と並べられており、前斎宮である秋好の朱雀院との関係が斎宮の悲恋として捉えられる証左となる。秋好の冷泉入内は、源氏にとって唯一可能な後宮政策であり、それによって冷泉御代に権勢を獲得するように、多分に政治的意図によるものであったが、その事実とは別に、斎宮であることが恋の障壁としてあらわれているといえよう。

以上、『大和物語』のように、斎宮と悲恋とは、物語の中で深く結びつくものであった。『大和物語』にあるような卜定による別離はもちろん、『源氏物語』のように立場が前斎宮であってさえ、かつてあった斎宮という立場が持ち出され

て恋愛を阻むものとして記述されることがある。このことは、同じく前斎宮である当子内親王の恋愛が、『栄花物語』当子内親王密通記事のうち巻第十三の部分において、斎宮の悲恋的に描かれていることを考えるときに注目されよう。

一―二、斎宮の恋愛と婚姻

ところで、当子内親王は実在の斎宮であるから、実在の斎宮についても考察しておかなければならない。特に、当子の恋愛事件はその退下ののちであるから、前斎宮という立場での恋愛や婚姻について見ておくことは不可欠だろう。退下後の斎宮の生活については必ずしも詳らかでない部分が多いが、ここでは、前斎宮の婚姻について考察していくこととする。

天武朝から後醍醐朝までに六十四人（内親王四十九人・女王十五人）の斎宮が卜定されているが、判明する範囲で退下後の入内・降嫁の例を数えると、天皇（皇太子・上皇）への入内は、光仁皇后井上内親王・桓武妃酒人内親王・平城妃朝原内親王・村上女御徽子女王・光厳上皇妃懽子内親王の五例である。また降嫁例は藤原師輔室雅子内親王・藤原教通室嫄子女王の二例である。退下後に結婚したのは斎宮六十四人中七人、十分の一程度である。退下後の斎宮の多くが未婚のままであった。

退下後の斎王の恋愛・結婚について、芝野眞理子氏は「単にその娘時代のある時期、斎宮、斎院の職にあったのだと考えられている場合もあるが、いったん神に奉仕する立場にあったものは、たとえ退下してもその立場を守りぬかねばならないと考えられて、そのことが彼女らの人生、とりわけ結婚という場合に大きな影響を与えた」とし、[12] 現斎宮に比べれば規制はゆるやかではあるものの、「前斎宮」であることは結婚・恋愛に影響したという見解を述べている。先に確認したように前斎宮の結婚例は事実として少なく、婚姻に対して規制があったようにも思われる。また、『栄花物語』当子密通記事の巻第十二部分に注目すると、父院の怒りの記述が繰り返されるなど批判的な記述となっており、その恋愛も好意的には受け取られないものであったとも考えられる。しかしそれは、「前斎宮」に限ったものと見てよいのだろうか。

服藤早苗氏は「退下後の伊勢斎宮・賀茂斎院は、ふつうの皇女として結婚もできた。（中略）退下後に男性と関係をもち父や兄に叱責された当子内親王や、娟子内親王などは、父母や後見人の承諾を得ない結婚だったからであり、結婚そのものがタブーだったわけではない」とし、[13]「前斎宮」であることが直接結婚を規制することはないとの理解を示している。実際、退下後に結婚した例もあることから、前斎宮にとって結婚が禁忌ではないとの氏の理解は肯えるものである。とはいえ一方で、前斎宮の結婚例が少ないというのも事実で、この点はどのように考えればよいのだろうか。

氏のいう、「ふつうの皇女のように」というのがポイント

になろう。前斎宮は皇族女性、特に基本的には内親王である。[14]その結婚に規制があれば、当然、前斎宮もそれに縛られることとなる。では、内親王は、実際どの程度結婚できたのだろうか。

天智・天武天皇から後醍醐天皇までの内親王宣下を受けた皇女について見てみると、[15]その結婚状況は、二百三十八人の内親王のうち天皇（皇太子・上皇含む）への入内が二十五人（約十パーセント）、親王室が十四人（約六パーセント）、降嫁が八人（約三パーセント）であり、結婚した内親王の総数は四十七人、全体の五分の一程度とやはり決して多いとはいえない。しかも時代によって偏りがある。天皇や親王と結婚した内親王の例は、飛鳥・奈良から平安初期にかけてのものがほとんどを占め、それ以降、内親王の結婚例は極端に少ない。次にまとまった結婚例を認めることができるのは醍醐天皇皇女であるが、ここでは臣下への降嫁例が集中して見られる。これらは政治状況の変化に応じたものであろう。[16]総じて見ると、平安初期以降、皇族・臣下といった相手を問わず内親王の結婚は少なく、平安初期以降の内親王はあまり結婚しなかったと考えてよいだろう。

そもそも、皇女の婚姻については、令に「臣娶二五世王一者聽」という規定があることが知られている。本来臣下が四世王以上を娶ることはできず、よって四世王以上の婚姻相手は皇族に限られていた。ところが、本来は内親王のみと規定されていた天皇への入内が、平安初期以降に藤原氏以下貴族の娘たちにまで広がると、それに伴って皇族の室にも貴族の娘が多くなった。結果、皇族女性たちは結婚相手を失うこととなり、未婚のまま生涯を終えることが増えたのである。

よって、基本的には「内親王」である「前斎宮」の結婚が少ないのは、ある意味で当然のことなのである。前斎宮の場合、内親王よりも僅かに婚姻した割合が低いものの、それについては、斎宮というものが、本人の病・親兄弟の喪や罪といった穢れ・天皇の代替わり等の事由がなければ退下しないものであり、退下したときには結婚適齢期を過ぎている場合が少なくなかったことなどが要因と考えれば、さほど不思議はないだろう。

しかし、規定の上で禁止されていないことと、婚姻を禁忌とする意識が働かないことは、必ずしもすぐにつなげてよいものではない。次に、内親王・前斎宮について、その恋愛が、特に皇族以外の臣下との場合にどのように意識されるものであったのか検討していきたい。以下は、『大鏡』より、藤原師輔（九条殿）と康子内親王（四宮）の場合である。

このおおきおとどの御母上は、延喜の帝の御女、四宮と聞こえさせき。延喜、いみじうときめかせ、思ひたてまつらせたまへりき。（中略）さて、内住みして、かしづかれおはしましを、九条殿は女房をかたらひて、みそかにまゐりたまへりしぞかし。世の人、便なきことに

申し、村上のすべらぎも、やすからぬことに思し召しおはしましけれど、色に出でて、咎め仰せられずなりにしも、この九条殿の御おぼえのかぎりなきによりてなり。まだ、人々うちささめき、上にも聞こし召さぬほどに、雨のおどろおどろしう降り、雷鳴りひらめきし日、この宮、内におはしますに、「殿上の人々、四宮の御方へまゐれ。おそろしう思し召すらむ」と仰せ言あれば、たれもまゐりたまふに、小野宮のおとどぞかし、「まゐらじ。御前のきたなきに」とつぶやきたまへば、後にこそ、帝、思し召しあはせけめ。

（太政大臣公季仁義公　二三二頁～二三三頁）

この場合、康子内親王が醍醐天皇鍾愛の内親王で「内住み」していることを考慮しなければならないが、傍線部の記述から、少なくとも宮中に暮らす内親王と臣下との恋愛が好意的に受け取られていないことはわかる。師輔と康子との私通を世間も天皇も不都合なことだと思っており、師輔の兄である藤原実頼（小野宮のおとど）は康子の私通を理由に挙げて御前への伺候を拒否していた。

しかし一方で、不都合と意識されるはずの行為をした師輔が咎められることはなかった。その理由は、波線部のように「御おぼえのかぎりなきによりて」である。この記述から、原則として不婚を貫くべきものと考えられた内親王の恋愛や婚姻が許される場合、相手の身分・立場などが影響したことが想定される。師輔は、醍醐皇女勤子内親王を室に迎えて内親王の臣下への降嫁の初例を作り、かつ後に雅子内親王・康子内親王も室として迎え、生涯で三人もの内親王を妻とした人物であるが、木船重昭氏は、師輔に対する内親王降嫁について、「朱雀朝に摂関家として実権を掌握した忠平一門の権勢あって」実現したこととし[17]、そこに政治性を認めている。高橋由記氏は、天皇の「裁可のある降嫁が男性貴族の栄光の証」であるとともに、「裁可のない結婚が後に容認されるのも、男性貴族の社会的立場の高さゆえ」であるとするが[18]、本来許されないものとして非難の対象である私通であればこそ、それが容認される、すなわち例外を作り得るということが、それを可能とするだけの権勢を備えていることを示すことになったのである。

このエピソードが様々な書に取り上げられることも、このことと無関係ではないだろう。スキャンダラスでセンセーショナルな話題であるがゆえに語られたというだけではなく、九条流の祖・師輔の特別性を示すものであったがために、多く語られたのだといえるのではないだろうか。あってはならない私通・密通の話題だが、単に禁忌破りに対する興味や関心以上の理由、すなわち政治的立場の高さを暗に示すものとしてこれが語られる場合があるのである。このことは、斎宮の描かれ方と王権との関わりを考えるときにも重要であろうが、ここでは一旦おく。

さて、次は斎宮についてだが、『栄花物語』当子密通記事を考える場合、当子は前斎宮であるとともに内親王でもあった。内親王の私通自体も非難の対象になるものと考えられるが、単にそれとして非難するなら、わざわざ『伊勢物語』にある在原業平と斎宮との密通を想起させるような記述をする必要はない。前斎宮には、内親王とは別に、「前斎宮」であるがゆえの意識上の規制がみとめられるのではないだろうか。次に、『十訓抄』を挙げて検討したい。

寛和の斎宮、野宮におはしけるに、公役滝口平致光とかやいひけるものに名立ち給ひて、群行もなくて、すたれ給ひけり。

それより野宮の公役はとどまりにける。

（五ノ十　一九六頁）

三条院皇女、前斎宮も道雅三位にあひ給ひて、世の人知るほどになりにければ、御髪おろし給ひにけり。三位、帥内大臣の御子なれば、致光には似るべきにあらねども、すべてあるまじき御振舞なり。

（五ノ十一　一九六頁―一九七頁）

この連続する二説話は、ともに斎宮の密通に関する話題を語るものである。ただし前者は現役時[19]、後者は退下後という違いがある。「寛和の斎宮」とは、花山朝の斎宮済子女王で、大来皇女以降の歴代斎宮のうち密通を事由に解任された唯一の斎宮である。彼女は野宮にあるとき野宮警護の武士と密通したことによって解任されたというが、その話に続けて前斎宮当子内親王と藤原道雅の恋愛事件の説話が配されているのである。説話では、道雅との関係が世間で取り沙汰されるようになったことで当子は尼になったとされている。また、波線部は、道雅の身分・立場を致光と比べているのだろうが、「似るべきにあらねども」とした上でも、道雅の振舞は「あるまじき」ものとされている。前斎宮という立場に意識レベルでの規制、すなわち、斎宮に準ずるものであり恋愛は禁忌という考え方がされている一例であろう。これをどの程度まで一般化して考えられるかという問題があるが、前斎宮が、斎宮であったということを理由に特別視された可能性を示すものとして、注目に価する。そういった意識があればこそ、『源氏物語』の秋好中宮と朱雀院の関係のような記述が、そして『栄花物語』当子内親王関連記事のような記述がなされるのである。

一―三、『栄花物語』巻第十三―斎宮の悲恋

さて、前斎宮である内親王と単なる内親王とで、その恋愛に向けられる意識に差異があるということは、つまり前斎宮を前斎宮として描くことによって、特別な効果が得られうるということである。ここでは、『栄花物語』当子内親王密通記事のうち、巻第十三における斎宮のモチーフについて、斎宮の悲恋のモチーフがあらわれたものとしてとらえ、考察し

ていきたい。

かくて前斎宮いと若き御心地に、このことといと聞きにくく思さるれば、いかにせんと人知れず思し嘆かれて、御覧ぜし伊勢の千尋の底の空せ貝恋しくのみ思されて、しほたれわたらせたまふに、げにわりなき御濡衣も心苦しきに、三位中将は跡絶えて、わりなくのみ思ひ乱れて、風につけたりけるにや、かくてまゐらせたりける。

榊葉のゆふしでかげのそのかみに押し返しても似たるころかな

人知れぬことも多かめれど、世に聞こえねばまねびがたし。また高欄に結びつけたまへりける、

陸奥の緒絶えの橋やこれならん踏みみ踏まずみ心まどはす

宮、「ふるの社の」など思されて、あはれなる夕暮に、御手づから尼にならせたまひぬ。またあはれに昔の物語に似たる御事ども。皇后宮聞きにくかりつれど、いみじう悲しう思さるることもおろかなり。院は聞しめして、雄々しき御心は、ひたみちに、あへなん、めざましかりつるよりはと思されけり。

（巻第十三・ゆふしで　九五頁―九六頁）

当子と道雅とは『大和物語』のように、卜定によって引き裂かれたというわけではもちろんないが、この巻には、『大和物語』を連想させる記述がある。また、斎宮女御徽子女王の和歌の引用もあり、当子が斎宮であったことが強く意識されて記述されていることは、まず間違いない。そして、道雅が当子に贈った歌は「榊葉のゆふしでかげのそのかみに押し返しても似たるころかな」であった。

道雅はその歌に、当子がまるで斎宮であった頃、すなわち恋が禁忌であった頃に戻ったようだ、という。斎宮であったことを象徴的な理由として、実らない恋を詠む和歌は、『源氏物語』において朱雀院が秋好中宮に贈ったそれにも見られたものであった。この歌が配されることによって、『大和物語』や『源氏物語』などに見られた斎宮の悲恋が、当子と道雅の恋に重層的に重なってくる。

河北騰氏は『栄花物語』当子密通記事について、「如何にも昔物語めかして、哀れに悲しい恋の物語として、語り伝えて行った女性たちの粉飾が読み取れる」とするが[20]、『栄花物語』が「またあはれに昔の物語に似たる御事ども」とする「昔の物語」とは、『大和物語』にあるような斎宮の悲恋を指すと考えられるのではないだろうか。単に当子の内親王という身分、荒三位と呼ばれた道雅の身分・立場ゆえに許されなかった私通としてではなく、前斎宮という当子の立場をふまえ、斎宮のモチーフを利用することによって、更に効果的に「あはれ」に描くことができるのである。巻第十三では、『大和物語』のような斎宮の悲恋のモチーフがあらわれており、斎宮という特殊な環境におかれていたということが恋愛を制

限する理由として用いられることによって、さまざまな斎宮たちの境遇が重なり、より悲恋的な語りとなっているといえよう。

二　物語の中の斎宮と王権

二―一、『伊勢物語』の斎宮と王権の視点

前章では、特に斎宮と恋を中心に考察を進めたが、本章では王権の視点から斎宮を見ていきたい。まず挙げるのは、斎宮を描く物語に大きな影響を与えたと考えられ、見逃せない作品である『伊勢物語』（六十九段）である。『伊勢物語』の名の由来となったとも言われる六十九段では、伊勢国に赴いた「男」と「斎宮なりける人」[21]との逢瀬、斎宮にとっては禁忌であるはずの恋の成就が描かれる。これは、卜定後三年目には伊勢に下向するものであったために京が主な舞台となる物語中には描かれることの少ない現役斎宮の姿が記述されるものとしても特徴的であり、[22]注目されよう。

むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩にいだしたててやり、夕さりはかへりつつ、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたつきけり。二日といふ夜、男、われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ざねとある人なれば、遠くも宿さず。女のねや近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに来たりけり。男はた、寝られざりければ、外の方を見いだしてふせるに、月のおぼろなるに、小さき童をさきに立てて人立てり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬにかへりにけり。男、いとかなしくて、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来しわれやゆきけむおもほへず夢かうつつか寝てかさめてか

男、いといたう泣きてよめる、

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ

とよみてやりて、狩にいでぬ。野に歩けど、心はそらにて、今宵だに人しづめて、いととくあはむと思ふに、国の守、斎の宮の頭かけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜、酒飲みしければ、もはらあひごともえせで、明けば尾張の国へたちなむとすれば、男も人しれず血の涙を流せど、えあはず。夜やうやう明けなむとするほどに、

女がたよりいだす盃のさらに、歌を書きていだしたり。取りて見れば、

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば

と書きて末はなし。その盃のさらに続松の炭して、歌の末を書きつぐ。

またあふ坂の関はこえなむ

とて、明くれば尾張の国へこえにけり。斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹。

（六十九段　一七二頁～一七四頁）

傍線部からわかるように、女と男との逢瀬は人目を憚らねばならないものであった。女が斎宮であるがゆえにままならぬ恋という意味で、物語世界はあくまでも悲恋を描いているといえるのかもしれない。記述には、男や女の行為を非難するニュアンスのものもない。ただし、未婚の皇女であることが卜定の条件となる斎宮が男との逢瀬を果たしたというのは、事実であれば決して許されることではない。[23]「水の尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹」である斎宮恬子内親王は、当帝（清和天皇）の譲位によって退下しており、男と通じたことによって解任されたという記録はないが、一方で、『伊勢物語』が基本的に在原業平を描いた事実として受け止められていたということも重要で、のちには業平と恬子との間に高階師尚という子ができていたという記録までが残される。これは本話が事実と認識されていた形跡だが、『権記』に外戚の祖の高階氏が斎宮の罪の結果の子であることを挙げて敦康親王の立太子を否定しているように、[24]『伊勢物語』本話の恋について、非難されるべき誤りであるという認識が存在していたことは確かであろう。しかも、それが皇位継承に関わって持ち出される。

非難の対象となるものという意味でこれを斎宮の密通と位置づけると、このようなイメージが物語に登場する他の斎宮（前斎宮）の恋愛を語る際にもあらわれることがわかる。その例として、『栄花物語』当子密通記事、巻第十二部分が挙げられよう。巻第十二では、当子内親王の父である三条院の怒りの記述が繰り返されており、悲恋的な巻第十三と比べ、非難されるべき密通のイメージが強い。ここに『伊勢物語』を想起させる「かの在五中将の」以下の記述があることで、文脈上、それが単なる内親王の私通ではなく、『伊勢物語』のような、斎宮の密通に重なる事件と理解できるようになっているのである。当子内親王は前斎宮であり、その点で、現役の斎宮の恋を描く『伊勢物語』とは異なる。それは『栄花物語』が当子の場合を、「まだまことの斎宮にておはせしをりのこと」とは違い、「前の斎宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべきことにもあらねど」とするとおりではあるが、違いを認識しつつも、やはり『伊勢物語』を想起させる記述をするのは、斎宮に関わる人物の密通が、ただちに『伊勢物語』を連想させるものであったということだろう。たと

え恋愛が絶対の禁忌ではない前斎宮という立場ではあったとしても、かつて斎宮であったことは強く意識されて、『伊勢物語』に描かれるような非難の対象としての斎宮の恋が描かれる場合があるのである。

そして、もうひとつ注目しておきたいことは、『伊勢物語』本話を王権と関連させて読む読み方があることである。榎村寛之氏は、斎宮が男のもとへやってくる場面を、天皇による斎宮の発遣儀礼の再現と読み[25]、神尾暢子氏は、『伊勢物語』では後宮女性や斎宮の男との密通が清和天皇体制に対する批判を含意すると指摘する[26]。斎宮と王権との関わりを考える上でも、斎宮の密通というモチーフは注目すべきものであろう。また前章に『大鏡』記事を引いたが、これは単に恋愛に関する記事である以上に、師輔の政治的立場の特別性を示すものでもあった。そうであるなら、『栄花物語』における当子と道雅の密通記事も、単なる斎宮の恋愛に関する記事というだけではない、権威、特に当子と関係の深い父院の権威と関わった意味づけを試みてよいのではないか。以降で詳しく考察していきたい。

二―二、斎宮の皇統と婚姻に見る王権との関わり

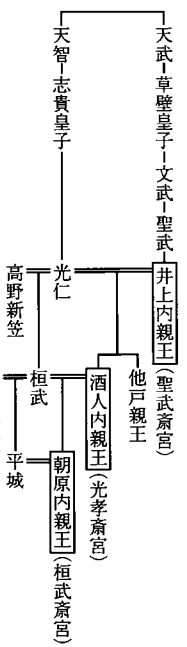
さて、『栄花物語』における前斎宮当子内親王の密通的恋愛叙述の効果を権威との関わりという視点から考えていく前提として、まずは実在の斎宮・前斎宮たちが、王権に対してどのような役割を果たしたのかを見ていくこととしたい。特に注目するのは、斎宮の属する皇統の問題である。

勝亦志織氏は、物語に登場する斎宮に、「傍系の天皇（皇統が続かない天皇）の皇女である場合が多い」という皇統譜の特徴があることを指摘する[27]。そしてこれは、物語中の斎宮のみに見られる現象ではない。歴史上の斎宮もまた傍系である場合が見られるのである。傍系の斎宮の存在には、何か特別な意味を見出せるのか。傍系の斎宮の果たした役割とは、いったい何なのだろうか。

史上にある六十四人の斎宮のうち、奈良時代から平安時代初期にかけて、特異な血統を持つ斎宮が見られる。皇統が天武系から天智系へ、すなわち天武直系の称徳天皇から天智皇孫光仁天皇へと移る時期の三人の斎宮、井上内親王・酒人内親王・朝原内親王である。【系図一】に示すように、彼女らは親子三代にわたり斎宮を務めているのである[28]。

聖武天皇の斎宮は聖武皇女井上内親王であったが[30]、井上は弟安積親王の死により退下したのち、白壁王（のちの光仁天皇）に嫁し、光仁即位にあたって皇后となった。その光仁の斎宮は、光仁と井上との娘の酒人内親王で、酒人もまたのちに桓武天皇の妃となっている。次の桓武の斎宮は、桓武と酒人との娘である朝原内親王が務め、朝原は退下後に平城天皇の妃となった。このような斎宮の立て方、婚姻が行われたのは何故だろうか。

【系図一】[29]



河内祥輔氏は、称徳天皇の後継に光仁天皇が擁立されたことについて、聖武皇女の井上内親王が立后されていること、光仁と井上との子、他戸親王が立太子していることに注目し、「光仁擁立の真の意味は、むしろ、立后と立太子の方にあるのではないか」と述べている。[31] 光仁は新たな皇統の祖としてではなく、天武の直系、他戸親王に皇統を渡すための中継ぎ的役割を期待された天皇であるとの理解である。

しかしのちに他戸は廃立され、皇位は桓武天皇に移った。光仁が中継ぎの天皇であり、その後皇統が他戸親王、つまり母方で天武系の血筋を持つ天皇に戻ると考えるとき、一代限りの天皇である光仁が自らの皇統の正統性を主張する必要はそれほどない。天武系皇女（井上内親王）の夫という立場で、即位の資格さえ認められればよいのである。[32] しかし、皇位が桓武へと受け継がれた時点で、これまでの天武系とは別の、光仁を祖とする直系皇統が成立していくこととなる。ここに至って桓武は、長く正統だった天武系に対して、自らの属する皇統の権威を強化し、その正統性を高めていく必要が出てきたのであろう。井上・酒人・朝原の三人の皇女は、このために利用されたものと考えられる。

河内氏は、桓武が酒人を妃にしたことについて、「彼の簒奪行為を免罪し、正当化する狙い」と「聖武の血統を承けた女性との婚姻によって、彼の皇位継承に正当性を獲得しようとする意味合い」のある「天武系直系皇統の権威を、婚姻を通して継受しようとする方策」であり、「平城は朝原を妻として、さらにこの方策を継承した」とする。[33]

しかし単に旧系統の血筋の皇女ということだけが重視されるなら、彼女たちが斎宮を経る必要はない。それにもかかわらず、特に酒人・朝原が斎宮に卜定されたことには、何か別の意図をも感じさせる。[34] 榎村寛之氏はこの三人の卜定、入内について、「天武系祭祀である伊勢神宮の祭祀の継承を図ったもの」としているが、[35] 祭祀は天皇の権威に対して大きな役割を果たすものであり、旧系統である天武系祭祀の継承を、天武系皇女を斎宮に立てることによって図ったことも、新系統が権威を獲得するための方策と考えることができよう。旧系統に属すことに加え、前斎宮、すなわち皇祖神天照大神に仕える斎宮であったという肩書きは、新系統が権威獲得を目指す上で行った彼女たちとの婚姻を、二重に有意義なものに

したのである。

光仁は、聖武皇女でその斎宮の井上内親王の夫という資格で皇位に即くことが可能であった。つまり井上は光仁天皇の即位の正当化に利用されたのである。また桓武・平城の代においては、即位を正当化し旧系統の権威を取り込むにあたって、母系で天武系に連なりつつ、天武系祭祀において重要な役割を担う斎宮を経た皇女との婚姻が利用されたのである。

皇統交代期には、このように、皇位継承の正当化や新系統の権威補強のために利用された旧系統の斎宮の姿が見えてくる。そしてこの三人の斎宮たちのうち、井上を除くふたりは、女系で見れば、結果として皇統が続かなかった天武系に連なる皇女といえ、傍系の要素を帯びた斎宮ともいえるのである。彼女たちが婚姻を通して新しい皇統の皇位継承の正当化や権威補完に利用されたのだとすれば、歴史上の、あるいは物語中の他の傍系の斎宮たちもまた、このように王権に対して権威付けなどの役割を担っており、それこそが傍系の斎宮の存在理由と考えられないだろうか。次に、三条天皇前後の、冷泉系と円融系の迭立と円融系皇統成立時期の斎宮の系譜に注目してみたい。

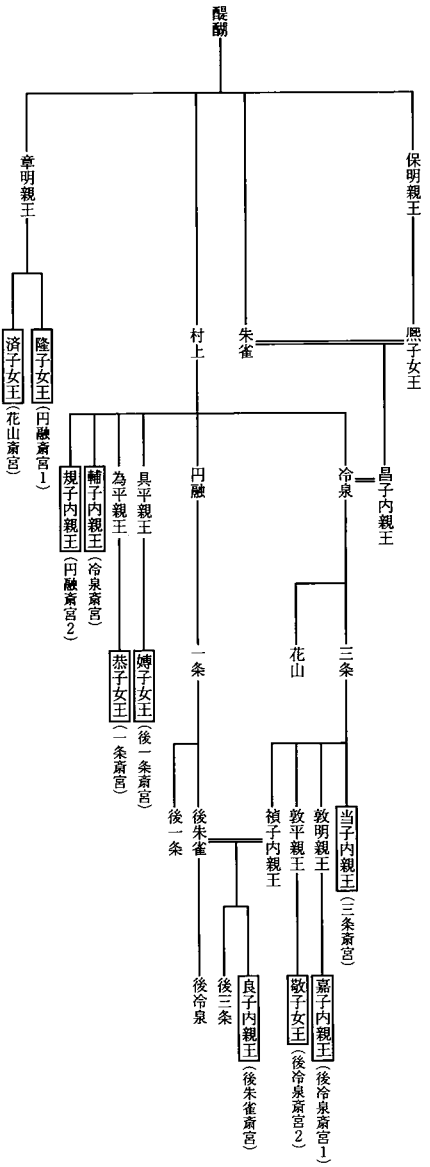
榎村寛之氏は斎宮の血統について調査し、この時期の斎宮について「天皇家の分裂の影響が斎王制に波及してくる」と述べる。具体的な現象として、「円融系の天皇である後冷泉朝の斎王二人がともに冷泉系出自であ」ることを挙げ、娘や異母姉妹が選ばれて同系出自が保たれている斎院に比べて、「明らかに冷遇と言える措置」としているのである。[36]

確かにこの時期の斎宮は天皇との血縁が薄い。それは氏も指摘する通り、斎宮に対する意識の変化が要因となっていよう。この時期にはすでに斎宮制度は形骸化が進んでおり、仏教を忌むことから罪深いものと意識されてもいた。[37]そのため時の天皇が近親の皇女を斎宮にすることを避けた可能性は否めない。しかし、後冷泉天皇の斎宮がともに冷泉系出自であることは、果たしてそれだけが原因なのであろうか。

保立道久氏は、光孝・宇多・醍醐と続く皇統の直系は、醍醐の第一子である皇太子保明の娘を妃とした朱雀に、そして朱雀の娘を妃とした冷泉に伝えられたとし、「王家の中に本来の正統は冷泉系にあるという観念が根強く存在した」ことを示唆している。[38]そうであるなら、冷泉系の斎宮が立っていることも単なる冷遇ではなく、奈良時代から平安初期にかけて、本来の正統である天武系皇女が斎宮を務めた例に類似するものとも考えられなよう。

後冷泉天皇のふたりの斎宮、嘉子内親王・敬子女王はともに三条の孫にあたる皇族女性である。また後朱雀天皇斎宮良子内親王も、母方で三条に連なる三条の孫の皇女なのである。ここまで、冷泉が村上皇女を、円融が醍醐皇孫と村上皇女を、花山（冷泉系）が醍醐皇孫を、一条（円融系）が村上皇孫を、三条（冷泉系）が皇女を、後一条（円融系）が村上皇孫をそれ

【系図二】



ぞれ斎宮に立てているのを見ると、両統迭立状態にある冷泉から後一条までの斎宮に、血統的な統一はない。それに対し、敦明親王廃立以降、すなわち冷泉系皇統が断絶した後の円融系天皇である後朱雀・後冷泉が立てたのが、ともに三条の孫にあたる斎宮ということになるのである。これは、光仁・桓武が酒人・朝原という旧系統の皇女を斎宮に立てた例にも重なるものであり、本来の正統から斎宮を出すことを重視し、旧系統の権威を取り込もうとした結果といえるのではないか。

皇統が一代ごとに交替する迭立時期の天皇たちにとっては自らの皇統の正統性を主張する必要性はさほど高くはないが、円融直系皇統が成立していく過程においては、もう一方の系統である冷泉系皇統に比して、円融系は自らの正統性・権威をより強化していくことが必要になり、冷泉系の斎宮はここに利用されたのである。

平安時代には、これ以前にも皇統の大きな変わり目があった。陽成天皇から光孝天皇に皇位が移り、光孝の子である宇

多天皇が即位するに至って光孝直系皇統が成立していく時期である。光孝は中継ぎ的即位であったと考えると、[39]結果的に光孝系皇統が成立した宇多天皇以降に旧系統に対して自らの属する系統の権威補強をはかる必要が生じたのであろうが、ここでは文徳・清和・陽成と続く結果的に傍系になった系統から斎宮を全く立てていない。[40]宇多は旧系統の権威を取り込むのではなく、否定することによって自らの系統の権威を相対的に高めようとしたと考えられ、[41]あえて本来の正統から斎宮を立てることを避け、自らの属する皇統の血筋にこだわった結果であろう。頑なに旧系統から斎宮を出すことを避けたように見える姿勢に逆に、ある系統から斎宮を出すことの意義が感じられるように思う。旧系統との融合、旧系統の権威を取り込むことで自らの系統の権威を高める方策をとった場合に傍系の斎宮が存在することは、やはり意味のあることではないか。三条天皇の孫の斎宮ばかりが三人立てられているのは、円融系天皇たちが、本来の正統である冷泉系皇統の権威を取り込み、自らの正統性をより強化しようとしたということのあらわれであり、斎宮はそのように皇統の分裂期において、その融合に利用し得る存在であったのである。

二―三、物語の中の斎宮と王権

さて、物語中の傍系斎宮の役割について、あらためて見ていくこととしよう。勝亦氏は傍系の斎宮として『源氏物語』や『狭衣物語』の斎宮を挙げ、「この二つの物語では、一世・二世の源氏が帝位を簒奪していく過程において、斎宮や斎院は利用されつつも自身の属する系譜は断絶してしまう」としている。[42]しかし、ここは、簒奪等による皇統の断絶・交代があるからこそ、傍系の斎宮が描かれなければならなかったと考えたほうがよいのではないか。物語では現実以上に、本来なら皇位継承権のないような人物が天皇に立つ事態が発生し得るが、正統ではない天皇には、即位の正当化や権威の補強が必要になる。そのような場合、正統ではない天皇を正当化し得る存在として、傍系の斎宮・前斎宮が登場するのである。このような事例として、次に『狭衣物語』『源氏物語』を具体的に検証し、その後、『栄花物語』当子密通記事の考察へと進んでいきたい。もちろん『栄花物語』は歴史物語であり、作り物語と必ずしも同一に考えられないから、比較する際には慎重であらねばならないだろう。しかし、『栄花物語』の記述については、記録類からの引用があるとともに、『源氏物語』からの影響が指摘されており、その意味で、これらの物語を考察することには意義があると考えている。

ではまずは、『狭衣物語』を取りあげる。『狭衣物語』は、主人公狭衣の周囲の女性が多く斎王であり、斎宮を考える上で注目に値する物語である。作中、狭衣の理想の女性であり続けた源氏宮は現役の斎院であったし、飛鳥井姫君を養育し、のちに狭衣室となった一条院一品宮は前斎院であった。また

狭衣の母は前斎宮であり、現役の斎宮としては嵯峨院女三宮が登場する。この女三宮は、作中には記述が少ないものの、天照神の託宣という重要な役割を果たしている。

嵯峨院にも、思し離れにし方ざまのことなれば、なのめにもいかでか思されん。命の長かりけるがうれしきことと、よろこばせたまふに、斎宮もあやしう諭しがちにて、宮も、悩ましげにしたまふよし聞こゆれば、嵯峨院など、思し嘆くに、天照神の御けはひ、いちじるしく顕れ出でたまひて、常の御けはひにも変りて、さださだとのたまはする事どもありけり。

「大将は、顔かたち、身の才よりはじめ、この世には過ぎて、ただ人にてある、かたじけなき宿世・ありさまなめるを、おほやけの知りたまはであれば、世は悪しきなり。若宮は、その御次々にて、行く末をこそ。親をただ人にて、帝に居たまはんことはあるまじきことなり。さては、おほやけの御ために、いと悪しかりなん。やがて、一度に位を譲りたまひては、御命も長くなりたまひなん。このよしを、夢の中にも、たびたび知らせたてまつれど、御心得たまはぬにや」などやうに、さださだとのたまはすること多かりけれど、あまりうたてあれば、漏らしつ。

（巻第四　三四二頁―三四三頁）

傍線部のように、斎宮（嵯峨院女三宮）が託宣をしていることがわかるが、その内容は波線部に見るとおり、狭衣を帝にというものであった。長谷川政春氏は、「女三宮や源氏宮が斎宮・斎院という巫女になって、いわば狭衣の意思に相違して、皇位に即けていく。しかも二世源氏であった狭衣を」と述べている。[43] 狭衣は二世源氏であり、本来なら皇位継承権のない人物である。[44] よって狭衣が帝になるためには、それを正しいとする理由が必要であった。この託宣は狭衣が帝位に即く展開において必要不可欠な要素といえるが、そのような託宣を斎宮が行っていることが注目されよう。

嵯峨院女三宮は、一度は狭衣への降嫁の話が出ながらも、その後斎宮に卜定された人物であり、その点で狭衣との関わりが全くないわけではない。しかしその関係は浅いものであるし、先述のとおり本文中の彼女に関する記述自体も少ない。同じ神の託宣をするなら、なぜ斎院源氏宮ではいけなかったのか。源氏宮は狭衣が想い続けた女性であり、その描写も存在感も、女三宮はもちろん、作中他のどの女性とも比べるべくもない。それでも狭衣に帝位を授ける託宣が斎宮によってなされたのは、長谷川氏が「「賀茂神」は狭衣に妻（形代の藤壺中宮）と子（申し子の若宮）を授け、「天照神」は、二世源氏の彼を帝位に即けるという役割分担をしていた」としているとおり、[45] 斎宮と斎院が仕える二神の性格の違いのためだろう。二神の役割の差は、斎宮と斎院のイメージと物語中に担う役割の違いにも繋がっている。天皇としては正統な血筋とは言い難い人物に皇位を授けるのは、皇祖神に仕える斎宮でなけ

ればならなかったのである。

すでに斎宮制度が衰退していたと考えられる時代においても、物語中の斎宮はこのような役割を果たしていた。一方で、『狭衣物語』が成立したと考えられる時期の至近に、注目される斎宮がおり、それが『狭衣物語』における斎宮の役割に影響した可能性もある。後一条朝斎宮の嬉子女王である。

彼女は退下後に藤原教通に降嫁したことを『栄花物語』が伝えており、[46]数少ない降嫁した前斎宮の例にも挙げられるが、託宣をした斎宮でもある。[47]田中貴子氏はこれを、「いままで形式的な巫女であった斎宮が、正統な天照太神祭祀者としての役割を取り戻そうとする動きを示す」とするが、[48]そもそも斎宮は創始当時から託宣などの巫女的行為を行っておらず、一概にそのように考えることはできない。ただし、この嬉子託宣が朝廷にまで伝わる特異な事件であったことは確かで、[49]嬉子は神話時代以来、初めて神懸かりした特殊な斎宮だったのである。

そのような嬉子が至近に存在する時代、斎宮が高祖神と深く結びついた存在として再度重要視され、その存在が一時的に大きなものになっていた可能性があろう。嬉子の次の斎宮に、当代の天皇の娘という天皇との血縁が極めて濃い内親王が選ばれているという事実から、天皇と斎宮の関係が意識されていた可能性もうかがえる。

ただし『狭衣物語』の場合、狭衣を帝位につけるために重要な役割を果たすのは現役の斎宮である。本来ならありえない人物に王権を授ける役割を果たす意味では注目されるものの、そもそも、天皇祭祀の一端を担うものであるその役職の性格上、現役斎宮が王権に対してある程度の役割を果たすのは当然とも考えられる。そこで次には、前斎宮の、かつ婚姻・恋愛に関わる記述と、王権との関わりを『源氏物語』に検討してみたい。

『源氏物語』に登場する唯一の斎宮は、前坊と六条御息所の娘で朱雀朝の斎宮をつとめ、退下後は冷泉帝に入内して後に中宮となった人物、いわゆる秋好中宮である。彼女が『源氏物語』の中でどのような役割を果たしているのかだが、坂本和子氏は、冷泉帝にとっての秋好の存在意義について、「幼い冷泉院を助け育てるものとして源氏と藤壺は斎宮女御を入内させた」「秋好中宮は前斎宮たるの資格—皇祖神に仕える巫女の持つ信仰的威力を有する者として、主人公源氏の御子である冷泉帝の后となるべく、物語の語り手によって用意された女性」と述べている。[50]

大臣聞きたまひて、院より御気色あらむを、ひき違へ横取りたまはむをかたじけなきことと思すに、人の御ありさまのいとらうたげに、見放たむはまた口惜しうて、入道の宮にぞ聞こえたまひける。「(中略)内裏にもさこそおとなびさせたまへど、いときなき御齢におはしますを、すこしものの心知る人はさぶらはれてもよくやと思

ひたまふるを、御定めに」など聞こえたまへば（中略）「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びの心地すべきを、おとなしき御後見はいとうれしかべいこと」と思しのたまひて、さる御気色聞こえたまひつつ、大臣のよろづに思しいたらぬことなく、公方の御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへのいとあはれに見えたまふを、頼もしきものに思ひきこえたまひて、いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても心やすくさぶらひたまふことも難きを、すこしおとなびて添ひさぶらはむ御後見は、かならずあるべきことなりけり。（澪標　三一九頁～三二二頁）

以上の引用からも、源氏が「いときなき御齢」の冷泉の後見を務められる人物として、冷泉よりも年上の「すこしものの心知る人」である秋好の入内を考えていることがわかる。また藤壺も、「おとなしき御後見」「すこしおとなびて添ひさぶらはむ御後見」として、秋好の入内に賛成しており、帝の後見が秋好入内の大きな理由となっていることは明らかである。ここでは、秋好が冷泉帝より年上であることが、帝の後見が可能な理由として肯定的に記述されている。しかしそれが不必要なほど頻りに繰り返されていることが、この時点で二十二歳と推定される秋好の入内の不自然さを、かえって示しているようにも思われる。[31] ではなぜ、入内が不自然とも思われる人物が、冷泉に配されたのであろうか。

秋好の入内は、この時点でそれにふさわしい娘を持たない源氏が唯一取り得る後宮政策であり、その意味で必ず果たされねばならないものであった。よって、かなりの年上であることは、帝の後見が可能になるプラスの要因として説明され、朱雀院の執着を無視してまで冷泉に配されることとなった。ところが、後見役として入内したはずの秋好が、実際に冷泉に対して具体的にどのような後見的行為を行ったのかは、『源氏物語』本文に必ずしも明らかでない。ただ、「斎宮の女御は、思しし も著き御後見にて、やむごとなき御おぼえなり」（薄雲　四五八頁）とあり、源氏の期待どおりに冷泉帝の後見役を務めていることが記されるのみである。一方で、澪標・絵合の段階での秋好の記述に特徴的といえるのは、斎宮的要素が強くあらわれていることではないだろうか。

院にも、かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう思しおきければ、「参りたまひて、斎院など御はらからの宮々おはしますたぐひにて、さぶらひたまへ」と、御息所にも聞こえたまひき。（澪標　三一九頁）

殿も渡りたまへるほどにて、かくなむと女別当御覧ぜさす。ただ御櫛の箱の片つ方を見たまふに、尽きせずこまかになまめきてめづらしきさまなり。さし櫛の箱の心葉に、

わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけき仲と神

やいさめし

（絵合　三七〇頁）

主に朱雀院との関わりの中での記述ではあるものの、斎宮発遣儀礼、別れの御櫛などが繰り返し回想され、すでに退下しているとはいえ、彼女には斎宮のイメージがつきまとう。物語の後半では中宮としての印象が強く全面に出るのに対し、ここでは、秋好は正に前斎宮であり斎宮の女御であり、「斎宮」から離れ切らない存在といえよう。制度から考えて当然存在しているはずの秋好の次の斎宮が、『源氏物語』には登場しないことも大きい。物語中で唯一の斎宮が、冷泉帝の後見役としての存在を強調されて入内する。そして、期待通りに後見役を務める。そのことは、本来ならば帝位に即くことなどなかったはずの冷泉帝の存在を追認的に許容され得るものにするために、効果をあげたのではないだろうか。

冷泉帝は帝の子ではない。源氏と藤壺との密通によって出来た不義の子であり、実際の血統は一世源氏の子の二世源氏でしかなく、本来なら皇位を継承できる人物ではない。その冷泉が即位する。絵合や澪標の時点では、将来的に誕生するかもしれない冷泉の皇子によって皇位継承がなされていく可能性、つまり正統ではない冷泉の血統がこの後何の障害もなく皇統を引き継いでいく可能性があるということである。このことは果たして自然に受け入れられるものなのであろうか。冷泉即位は、実態を見れば二世源氏による簒奪に近いが、そうであるのに、その血統は一代限りに終わらず、次代以降に続いていくかもしれない。恒久的な皇統の乱れにも繋がるこの即位に対する抵抗感の減少をはかるために、皇統の乱れが正される方策として正統の血筋を母方から取り込む可能性を作っているとは考えられないだろうか。

秋好の父は前坊、すなわち早く故人になることさえなければ皇位を継承した人物であり、順当に進めば皇統は秋好の父に流れるはずであった。実際にはそうはならず、秋好は結果的に傍系となりはしたが、前節にとりあげた保立氏の指摘、醍醐皇太子保明親王の娘を妃とした朱雀天皇、朱雀天皇の娘を妃とした冷泉天皇が醍醐の直系（正統）と意識されたというように、前坊の娘の夫という立場は冷泉帝を正当化し得るものであった。かつ斎宮であったという経歴を持つ彼女の場合、その入内は、桓武・平城が酒人・朝原を妃とした例にも重なる。前坊の流れを汲み斎宮であった秋好の夫という資格において、冷泉の皇位継承は追認、許容され得るのである。

続いて、秋好と前帝朱雀院との関係に注目していこう。秋好は、冷泉に対しては即位の正当化の役割を担ったものと理解できる。一方で、朱雀院に対してはどうであろうか。朱雀は斎宮発遣儀礼の折から秋好に恋情を抱いており、退下後もそれは繰り返し記述され、秋好への執着が読み取れる。しかし源氏と藤壺の画策によって彼女は朱雀院ではなく冷泉の妃となってしまうのであり、「院より御気色あらむを、ひき違へ横取りたまはむ」という状況になる。以下の引用は、すで

に冷泉に入内した秋好に対して朱雀院が、冷泉御前での絵合のための絵を贈る場面である。

院にもかかること聞かせたまひて、梅壺に御絵ども奉らせたまへり。

年の内の節会どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに描けるに、延喜の御手づから事の心書かせたまへるに、またわが御世のことも描かせたまへる巻に、かの斎宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思しければ、描くべきやうくはしく仰せられて、公茂が仕うまつれるがいといみじきを奉らせたまへり。艶に透きたる沈の箱に、同じき心葉のさまなどいといまめかし。御消息はただ言葉にて、院の殿上にさぶらふ左近中将を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せたる所の神々しきに、

身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちを忘れしもせず

とのみあり。聞こえたまはざらむもいとかたじけなければ、苦しう思しながら、昔の御髪ざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞ恋しき

とて縹の唐の紙につつみて参らせたまふ。御使の禄などいとなまめかし。

院の帝御覧ずるに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思ほしける。

（絵合　三八三頁―三八五頁）

注目したいのは、秋好からの返歌に「あはれ」を感じた院が「ありし世を取り返さまほし」との思いを抱いている点である。頭注では「ありし世」を「在位のころ」とし、「院の心は過往の思い出に固執し、逆に現在の無力を際立たせる」とする。[32] 朱雀院が在位の頃を取り戻したいと思うのは、在位の頃、すなわち王権を手にしていた頃であったならば、冷泉帝ではなく自分こそが秋好を手に入れられたかもしれないと考えるからであろう。逆に言えば、現在の状況、秋好を得ることができなかったということは、朱雀院がすでに王権を失っていることの象徴ともなっている。その上、波線部、「大極殿の儀式」「しめのほか」「そのかみ」「しめのうち」「神代」などの斎宮を連想させる表現によって、ここでの秋好には斎宮のイメージが強くあらわれている。朱雀院は、「朱雀朝の斎宮」、「自らの斎宮」だった秋好を冷泉帝に奪われたことを嘆いて「ありし世を取り返さまほし」との想いを抱いているように読めるのではないか。この場面では、前斎宮たる秋好を得られなかったことが、退位後、権勢を失った朱雀院の有様を象徴的に示しているのである。

斎宮を失うという形式が王権の消失を象徴するものとして理解できることは、『栄花物語』当子内親王密通記事の位置

づけを考えるときに示唆的であろう。

二-四、『栄花物語』巻第十二―斎宮の密通と王権喪失

『栄花物語』巻第十二の当子密通記事は、『伊勢物語』を想起させる記述、父院の怒りの記述の繰り返しが特徴的である。

かかるほどに、前斎宮上らせたまひて、皇后宮のおはしまする宮は狭しとて、またしらせたまふ所にぞおはしまさせたまひける。年ごろにいとおとなびさせたまへる御有様も、いみじくおろかならず思し見たてまつらせたまへれど、ほかにしばしとておはしまさせたまひけるほどに、帥殿の松君の三位中将、いかがしけん、参り通ふといふこと世に聞えて、ささめき騒げば、宮いみじく思し嘆かせたまふほどに、院にも聞しめしてけり。異事ならず、斎宮の御乳母、やがてかの宮の内侍になさせたまへりし中将の乳母の仕業なるべしとて、院いみじくむつからせたまひて、やがて永くまかでさせたまひつ。院には、いとどしき御心地に、これを聞しめししより、いとどまさらせたまふやうに思されて、宮たちを隙なう御使にて、皇后宮と内とのほどの御消息いみじうしきりなり。斎宮われにもあらずいみじう思さる。中将の内侍は、やがて逐はせたまひしままに、かの道雅の君迎へとりて、わが御もとにいみじういたはりて置きたりと聞しめす。さて院には、皇后宮めざましう思しめされて、人知れずいみじう思し嘆かせたまへど、まことそらごと知りがたき御事なれど、世にかく漏り聞えたるに、院の御気色のいといみじきなり。かの在五中将の、「心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ」など詠みたりしも、かやうのことぞかし。それはまだまことの斎宮にておはせしをりのことなり。されど、これぞ前の斎宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべきことにもあらねど、院のいときはだけく思しのたまはするが、いとかたはらいたきになん。皇后宮いといみじう思し乱れたるに、宮々の御気色もいといみじきに、東宮もいみじく心やましげに思し乱るべし。

（巻第十二・たまのむらぎく　八九頁-九〇頁）

傍線部のように『伊勢物語』を思わせる記述、つまり斎宮の密通のモチーフによって、この記事は単に父院の許可のない内親王の私通として非難するよりも、二重に非難のニュアンスを出すとともに、よりセンセーショナルなものとなっているといえよう。それとともに、斎宮と王権という観点でも、ここにあらわれる斎宮の密通のモチーフは注目される。実在の斎宮（前斎宮）や物語中の斎宮（前斎宮）は、天皇の権威との関わりが意識される存在であり、また、そうであればこそ、斎宮を失うことが、すなわち権威の消失を象徴する場合もあったが、当子内親王は三条朝の斎宮であったから、『栄花物語』記事は、三条院が自らの斎宮を道雅によって奪われた形に記述されているといえるものなのである。するとこれは、

三条院の権威を否定的に描いている記事との理解ができるのではないだろうか。

このような、天皇（院）の権威と斎宮のモチーフとの関係を考えるために、以下、巻第十二に見られる三条天皇に関する記述を取り上げてゆくこととする。『栄花物語』巻第十二は、三条天皇の退位および後一条天皇の即位を記述する巻である。後一条天皇は一条天皇と藤原道長女彰子との間の皇子である。道長を称賛する傾向にある『栄花物語』にとって、道長の孫にあたる天皇の即位は特に力を入れて記述されるべき事柄だったであろう。巻第十二の冒頭は、「今年東宮七つにならせたまふ。長和三年といふに、御書始の事あり」（同四七頁）と、東宮（のちの後一条）の書始の記事から始まっている。一方で、三条については病悩の記述が繰り返されるなど、マイナスイメージを伴う記事が多い。

上はともすれば御心あやまりがちに、御物の怪さまざまに起こらせたまへば、静心なく思しめされて、内裏を夜昼に急がせたまふは、おりゐさせたまはんの御心にて、内裏を造り出でざらんがいと口惜しく思しめさるるなるべし。（同　五三頁）

かくて帝御心苦しう、なほ久しく保つまじきなめりと思しめして、内裏のえ出で来まじきことを、よに口惜しきことに思し嘆かせたまふ。（同　六四頁）

傍線部は、三条天皇の病に関する記述である。これ以降にも、「御物の怪」という言葉が繰り返されており、巻第十二では三条の病悩が一貫して記述されるが[53]、波線部からは三条天皇が病を理由に退位を考えていることもわかる。また、破線部には内裏再建に強いこだわりを持っていることが読み取れるが、「内裏を夜昼に急がせたまふ」理由は「おりゐさせたまはんの御心」からであった。

史実を鑑みると、宇多天皇から冷泉天皇までの五代すべての天皇は、内裏で践祚・受禅、崩御・譲位しているが、円融天皇は内裏焼亡のため堀川院で譲位、続く花山天皇は堀川院で受禅、内裏で譲位している。一条天皇は内裏焼亡ののち新造なるも還御することなく一条院で譲位した[54]。一条天皇に続いて即位した三条天皇は、藤原氏の摂関政治のもと、在位中、道長の圧迫を受け続けたものと考えられる。そうした三条天皇が内裏の再建を強く望んだのは、退位を迫る道長に対する引き延ばし工作でもあっただろうが[55]、内裏は天皇の権威の象徴であったためでもあろう。三条天皇の天皇としての権威は、三条天皇によって再建された内裏に象徴される。あるいは摂関家に圧迫され続けた天皇は、せめて内裏で退位することによって自らの天皇としての権威を最低限示そうとしたのかもしれない。そうであり、『栄花物語』が三条の内裏へのこだわりを強調すればこそ、次の記述は三条の天皇としての権威にとって、マイナスイメージを容易に付加し得るものであろう。

かくて内裏造り出づれば、十月に入らせたまふ。（中略）さて入らせたまひて、日ごろおはしまし渡るほどに、内の御物忌なりける日、皇后宮の御湯殿仕うまつりけるに、いかがしけん、火出で来て内裏焼けぬ。（中略）夜昼きびしう仰せられて、急ぎ造り磨きたりけるに、入らせたまひて一月だになくてかかることはあるものか。これにつけても、帝世の中心憂く思さるることかぎりなし。（中略）上はおりさせたまはんとて、かく夜を昼に急がせたまひしかども、すべて心憂く。かかることのあるを、「内裏の焼くることたびたびになりぬ。一条院の御時などたびたびありしかど、このたびのやうにあへなきたびなし」と、殿の御前なども、いみじう思し嘆かせたまふ。（中略）かへすがへすもめづらかなることを、上はよろづのことのなかにいみじく思しめさるべし。おりさせたまはむにも、内裏などよく造りて、例の作法にてと思しめしつるに、かへすがへす口惜しく、さりとてまた造り出でんを待たせたまふべきならずと、心憂き世の嘆きなり。末の世の例にもなりぬべきことを思しめすもことわりにのみなん。（同　六六頁―六八頁）

新造内裏焼失の記事であるが、傍線部、「入らせたまひて一月だになくてかかることはあるものか」には、このようなことは本来なら起こるはずのない事だという意識がうかがえ、「末の世の例にもなりぬべき」変事が起こったという事例を以て、三条が天皇の位に相応しくないということを暗にほのめかしているように理解できる。「一条院の御時などたびたびありしかど、このたびのやうにあへなきたびなし」という殿の御前（道長）の言葉からは、一条朝と三条朝を比較して三条朝を劣るものと見る意識を読み取ることができよう。また、波線部の記述のように、「おりさせたまはんとて、かく夜を昼に急がせたまひしかども」と、三条には新造内裏での退位への強い希望があり、「おりさせたまはむにも、内裏などよく造りて、例の作法にてと思しめしつる」と、たとえ譲位するにしても内裏で「例の作法」で行い、天皇としての威儀を整えたいとの考えがあればこそ、この内裏の焼失記事はより効果的に三条天皇の権威を否定的に描く記事となり得る。『栄花物語』の記事は続いて、「かかるほどに、御心地例ならずのみおはしますうちにも、もののさとしなどもうたてあるやうなれば、御物忌がちなり」（同　六八頁）と、三条の不調を繰り返し述べ、ついに「長和五年正月十九日御譲位」（同六九頁）ということになるのである。

他にも、三条天皇の天皇としての権威を否定的に描いていると理解できる記事が見られる。禔子内親王降嫁に関する一連の記事である。これについて高橋由記氏は「かってない尊母所生の皇女降嫁が臣下の事情によって破談にされた大事[56]」としている。

女二の宮児よりとり分きていみじうかなしうしたてま

つらせたまふに、我が身だに心のどかにおはしまさば、いかにもいかにもあるべき御有様なれど、ともすれば今日か明日かとのみ心細く思しめしたれば、いかでこの御ためにさるべきさまにと思しめすに、ただ今さべく思しめしかけさせたまふべきことのなければ、「この大殿の大将殿などにや預けてまし。御妻は中務宮の女ぞかし、それはいかばかりかあらん。さりともこの宮にえや勝らざらむ。またわれかくてあれば、えおろかにあらじ」と思しとりて（後略）　（同　五四頁-五五頁）

いつまで帝位を保てるかと不安を抱く三条天皇は、帝位にあるうちに女二の宮（禔子内親王）を大殿の大将殿（藤原頼通）に降嫁させることを思いつく。頼通室には中務宮の女（隆姫女王）がいるが、波線部「さりともこの宮にえや勝らざらむ」とするように、三条は、女王隆姫が内親王禔子に勝ることはあるまいという考えを持っている。かつ傍線部、「われかくてあればえおろかにあらじ」というように、三条は自らが帝位にあることを理由に、頼通も禔子を疎略には扱うまいと考えており、禔子内親王の藤原頼通への降嫁は、三条天皇が自らの位を頼みに決定したことであることがわかる。しかし、『栄花物語』はこの後に頼通と隆姫の仲らいを語り、隆姫は禔子に勝るまいという三条の考えとは反対に、禔子は隆姫に勝るまいとの頼通の考えが記述され[31]、具平親王の霊によって頼通が病となったことで縁談は破談となってしまう。禔子内親王降嫁は、天皇がその位を頼みにして希望したことであったにも関わらず、それが実現しないのである。これらの記述は三条天皇の天皇としての権限の弱体化を暗に示し、権限のない天皇のイメージによって権威の低下が連想されることになろう。

三条天皇退位後にも災難は続く。退位後の御所である枇杷殿の焼亡である。

あやしう、今年はなほ世の中火騒がしくて、また所どころ焼けぬ。人の口やすからぬ世にて、「一条殿と枇杷殿と焼くべし」と言ひののしれば、うたて思されて、御慎みなどありけれど、十月二日枇杷殿焼くるものか。あさましういみじともおろかなり。さるべくものいはするなりけりとも、今ぞ見ゆる。（中略）院、宮、「いとあさましきことなりや。よろづ今はかかるべきことかは。おぼろけの位をも去り離れたるに、かかるべきにあらず。人の思ふらんことも恥づかし」と思しめしけり。

（同　八三頁）

この記事では、「おぼろけの位をも去り離れたるに」との記述から、天皇の位を降りたにもかかわらず御所が火事になったことを三条が嘆いていることが読み取れる。天命思想に基づき譲位前のあっけない内裏焼亡を天子の不徳のための災異と考えたとしても、それであるなら位を降りた後には災異はおさまるはずである。しかし枇杷殿でも火事が起こった

ことによって、自らの不徳は退位後にまで災異をもたらすほどのものであるのか、と三条院は思うのであろう。また、そのように「人」も「思ふらん」と考え、辛く感じているのである。

一方で、「かくて御禊になりぬれば、いみじうつねにも似ず、これはなにはのこともあらためさせたまへり」（同　八五頁）、「霜月になりぬれば、大嘗会とて、また人々ひびきのしる。五節も、今年は今めかしさ勝り、をかし」（同　八七頁）など、新帝後一条天皇の大嘗会などの記述は華やかになされている。「このたびの御即位、御禊、大嘗会などのほどの事ども、すべて数知らずめづらし」（同　六九頁）とあるなど、病がちで様々な懊悩が絶えない三条院の様子の描写とは対照的であるといえよう。

後一条天皇の書始の記事に始まり、三条天皇の一貫した懊悩の様が描かれる巻第十二である。帝位を長く保てそうもないという意識、それならせめて内裏での譲位をと望むが、再度の焼亡によってそれも叶わない。また、自らが帝位を頼みに望んだ禔子内親王の頼通への降嫁も実現せず、退位ののちですら御所が焼けるという災難にあう。そして、後一条天皇の大嘗会に関する華やかな記述の直後に、前斎宮当子内親王の密通記事が配されるのである。後一条に関する華やかな描写とは対照的であるからこそ、この当子密通事件の記事によって、三条にはよりいっそうにマイナスイメージが付加されることになるだろう。

ところで、『栄花物語』におけるすべての三条描写に、負の要素が強く見られるわけではない。巻第十一には、「えもいはずめでたき御直衣に、なべてならず輝くばかりなる御衣どもを重ねさせたまへり。御かたち有様、雄々しうらうらうじう恥づかしげにおはします」（巻第十一・つぼみ花　三六一三七頁）と、肯定的な描写もあるのである。それが、巻第十二では一転する。この巻では、三条描写は一貫して負の要素が強く、かつその天皇としての権威にマイナスイメージを付加するものが多い。この三条の描き方の急激な変化には、特別な意味があろう。

後一条の即位を華やかに一点の曇りもなく記述するためには、三条の退位が不審なものであってはならない。退位が不自然であれば、後一条の即位の正当性が疑われるからである。また、退位したのちの三条の権威は低い方が望ましい。そうすれば即位した後一条の権威が相対的に高く見えるであろう。それはすなわち、三条の天皇としての権威が、自然と納得される形で、否定的に記述されねばならないということである。巻第十二の三条関連の記述は、この目的に終始していると考えられる。

このような巻に当子内親王密通記事は記述されている。よって、この記事もまた、巻第十二の他の三条関連記事の例に漏れず、三条にマイナスイメージを付加する性格を持つも

のと考えられる。そして、この記事で、三条の権威にマイナスイメージを付加する働きをする要素が、娘内親王の臣下との私通に加えた、斎宮の密通のモチーフであろう。

単に自らの皇女と臣下との私通であっても、内親王の結婚に対する認識からすれば十分に醜聞になり得るものであり、それのみでも三条の権威を否定的に描くことは可能である。しかしそれに斎宮のモチーフが加わったことで、更に効果的に三条のイメージに負の要素が付加されることとなる。内親王の私通に斎宮の密通のイメージが重なって二重の醜聞となり、かつ斎宮を奪われるという形式に描かれることよって、権威が象徴的に否定されるということである。斎宮（前斎宮）は、皇祖神や皇位と関わって描かれ、天皇の権威にとって重要な役割を果たす存在と捉えることができた。また、ゆえにそれを失うことが権威消失を象徴する場合があった。前斎宮当子内親王の臣下との密通が斎宮の密通として記述されると、それは三条院にとっては自らの斎宮を奪われたということになる。そのように描写されることによって、『栄花物語』当子密通記事は三条院の権威の否定的描写としてはたらくのである。斎宮のモチーフがあらわれている事は、ここでは、退位した三条がすでに王権を失っていることを強調・確認し、即位した後一条の地位の相対的向上を描く効果をもたらしているといえるだろう。

おわりに

以上、歴史上の斎宮の事績を参考にしながら、物語中の斎宮について、王権との関わりという側面を取り入れながら考察を試みてきた。斎宮（前斎宮）が物語に登場する場合に恋愛が絡む場合が多いことから、『大和物語』『伊勢物語』に描かれる斎宮の悲恋・密通のモチーフを端緒に考察を進め、『栄花物語』当子内親王密通記事について、それらのモチーフがどうあらわれ、どのような効果をもたらしているかを考察した結果は、以下のようなものである。

巻第十三には斎宮の悲恋のモチーフがあらわれており、それによってより悲恋的な語りとなっている。また、巻第十二には斎宮の密通のモチーフがあらわれており、それによってよりセンセーショナルな記事となるとともに、三条院の権威否定記事としてのはたらきをするものであった。巻第十二の記事で、三条院の権威にマイナスイメージを効果的に付加するためにはたらいている要素は、一つに、内親王の私通に斎宮の密通のイメージが重なり二重の醜聞となること、二つ目に、斎宮は歴史上でも権威と関わる存在であり物語中でもそのような描かれ方をすることがあったから、その斎宮が臣下によって奪われるという形により、三条院の権威消失が象徴されるということである。このように斎宮のモチーフを効果的に利用した描写は、三条退位と後一条即位が描かれる巻第

十二において、三条の権威を否定的に描く一連の記事のひとつとなっていたが、特に後者の要素は物語中で王権と関わって描かれる斎宮の姿といえよう。

もちろん、物語に登場するすべての斎宮について安易に王権と関連させることはできないだろうし、王権と関わらない斎宮の姿の理解など、論及できなかった点も多い。また、王権との関わりという点では、院政期に前斎宮が准母となるような、幼帝の養母的役割を担う前斎宮の姿が物語中にどう反映されるのかといったことにも論は及んでおらず、更に検証を要する点が多々残されていよう。とはいえ、物語における斎宮の、王権と関わる姿の一例を示すことはできたのではないかと思う。

注

(1)斎宮の呼称には、「斎」「斎内親王」「斎女王」「斎王」などがある。平安時代以降、伊勢神宮に奉仕する皇女を指しての「斎王」の語があらわれ定着していくが、同時に賀茂斎王も創始され、やがて伊勢斎王は「斎宮」と呼称されるようになる。本論では、賀茂斎王との区別のため、伊勢斎王の呼称は「斎宮」で統一する。賀茂斎王は「斎院」とし、「斎王」とした場合はその両方を指すものとする。

(2)榎村寛之「斎王制と天皇制の関係について」(『律令天皇制祭祀の研究』塙書房・一九九六　初出「斎王制と天皇制―特に血縁関係を中心に―」『古代文化』第四三巻四号・一九九一)には、斎宮の卜定の仕方についての考察がある。

(3)斎宮の数は、倭姫命など伝説上の斎宮を除き、存在が確実とされる最初の斎宮である大来皇女を起点として数えた。また歴代は、特に奈良時代の斎宮に諸説あるが、本論では、『平安時代史事典』(角川書店)、『国史大辞典』(吉川弘文館)、『歴史のなかの皇女たち』(服藤早苗編・小学館・二〇〇二)などの斎宮一覧を参考にしている。

(4)『栄花物語全注釈(三)』(松村博司・角川書店)は、この部分の語釈に『大和物語』藤原敦忠と斎宮雅子内親王の恋愛を語り、「伊勢の海の千尋の浜にひろふとも今はかひなくおもほゆるかな」(九十三段　三一六頁)という和歌を載せる段を引く。

(5)『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店)によれば、「榊」は「勅撰集では(中略)ほとんどが神遊び歌・神楽歌・神祇歌に分類されて」おり、「ゆふしで」は「神社・神に関係して詠まれるのが基本」であり、「そのかみ」は「『かみ』に『神』を掛ける例が多」く「何らかの形で神とかかわる歌の中で詠まれることになる」と、すべて神に関連する語である。

(6)『斎宮女御集』「259みな人のそむきはてぬる世中にふるのやしろのみをいかにせん」

(7)勝亦志織「物語史における斎宮・斎院の変貌」(『古代中世文学論考　第十三集』新典社・二〇〇五)一八六頁

(8)榎村寛之前掲　一三七頁

(9)本論では、『中世王権の成立』(伊藤喜良・青木書店・一九九五)などを参考に、天皇の(政治的)権力・(観念的)権威を指して「王権」とする。

(10)田中貴子「斎宮の変貌―「聖」と「性」のはざまで―」(『聖な

る女―斎宮・女神・中将姫』人文書院・一九九六　初出「斎宮の変貌―中世文芸の世界から」『日本史研究』三六六号・一九九三）八七頁

(11)久徳高文「斎宮の恋―雅子内親王と敦忠―」（『山崎敏夫教授追慕記念論集』中世和歌とその周辺』笠間書院・一九八〇）二五八頁

(12)芝野眞理子「前斎宮・前斎院の生涯―その入内と降嫁を中心に―」（『京都女子大史窗』第三七号・一九八〇）二五頁―二六頁

(13)服藤早苗「平安時代―王朝を支えた皇女」（『歴史のなかの皇女たち』）七六頁

(14)『延喜式』斎宮寮によれば、斎宮は基本的に内親王から選ばれた。また、斎王という語が定着する以前、伊勢神宮に仕える内親王を指しての「斎内親王」という語が見られるとおり、斎宮となっても内親王であることは変化しないと思われる。

(15)皇女の結婚については、今井源衛「女三宮の降嫁」（『源氏物語の研究』未来社・一九六二）に詳しい。

(16)以上、斎宮および皇女の人数・内訳・結婚等の事跡は、『歴史のなかの皇女たち』附録「伊勢斎宮表」「皇女一覧表」によった。

(17)木船重昭「雅子内親王と敦忠・師輔」（『中京国文学』第六号・一九八七）八一頁

(18)高橋由記「『栄花物語』における皇女の結婚」（『新栄花物語研究』山中裕編・風間書房・二〇〇二）一二三頁

(19)『斎宮志』では、初斎院・野宮から退下した（伊勢に下向していない）場合も斎宮に数えており、一般的に、卜定の時点で斎宮は斎宮となると考えてよいようである。

(20)河北騰「栄花物語に於ける説話の特質」（『日本文学研究大成大鏡・栄花物語』国書刊行会・一九八八）三一一頁

(21)「斎宮なりける」を、「斎宮（役職）である」と解するか、「斎宮（場所）にいる」と解するかは問題であるが、ここではこの話を斎宮の密通として読む。『権記』寛弘八年五月二十七日条には「但故皇后宮外戚高氏之先、依斎宮事為其後胤之者、皆以不和也、今為皇子非無所怖、能可被祈謝太神宮也」（『増補史料大成　権記』・『帥記』一五七頁）とあり、比較的早い段階から本話が斎宮の密通として実話と理解されていた形跡が認められるからである。

(22)他に、『大和物語』（三十六段）に斎宮柔子内親王と堤中納言（藤原兼輔）の対面場面が、『狭衣物語』には斎宮が帝位について託宣を行う場面がある。

(23)花山朝斎宮済子女王は密通によって退下している。また、『日本書紀』には「其二日、磐隈皇女。更名夢皇女。初侍二祀於伊勢大神一。後坐レ奸二皇子茨城一解。」（巻第十九・欽明天皇二年三月条　三六四頁）、「以二菟道皇女一、侍二伊勢祠一。即奸二池辺皇子一。事顕而解。」（巻第二十・敏達天皇七年三月条　四七六頁）と、伊勢神宮に仕えていた磐隈皇女・菟道皇女が、奸によって解任された記事が見られる。

(24)注21参照

(25)榎村寛之「『斎宮の恋』と平安前期の王権―『伊勢物語　狩の使』章段の意味するもの」（『古代文化』第五六巻一号・二〇〇四）

(26)神尾暢子「天皇章段と体制批判―清和天皇と後宮女性―」「春日斎女と伊勢斎宮―奈良春日と体制批判―」（『伊勢物語の成立と表現』新典社・二〇〇三）

(27)勝亦志織前掲　一九四頁

(28)他に、朱雀朝斎宮で村上天皇女御となった徽子女王の娘、規子

内親王も円融天皇の斎宮になっており、ここにも親子二代にわたる斎宮は存在している。

(29)系図は、『平安時代史事典　資料索引編』「伊勢斎宮表」、『歴史のなかの皇女たち』附録「伊勢斎宮表」、榎村寛之前掲（2）論文所載の系図等を参照して作成した。なお、【系図二】についても同様である。

(30)井上内親王は元正天皇の時代に斎宮に卜定されているが、父聖武の時代にも引き続き斎宮を務めているため、ここでは聖武斎宮とした。

(31)河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』（吉川弘文館・一九八六）一三〇頁―一三一頁

(32)旧系統の皇女の夫という資格で皇位継承を正当化しようとしたと考えられる例として、たとえば継体天皇の場合がある。『日本書紀』に「立二皇后手白香皇女一、修二教于内一、遂生二一男一。」（巻第十七・継体天皇元年三月条　二九二頁）とあるように、継体は即位後に仁賢皇女の手白香皇女を皇后に冊立している。

(33)河内祥輔前掲　一五九頁―一六〇頁

(34)酒人内親王は、母后井上内親王が天皇への呪詛の疑いによって廃后となったにもかかわらず、その後に斎宮に卜定されている。また、田阪仁・泉雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から―史跡東部の区画造営プランをめぐって―」（『古代文化』第四三巻第四号・一九九一）によれば、史跡東部に、方形区画内に整然と立ち並ぶ建物施設跡が見られ、これは酒人のときに整備された可能性が高いという。この意味でも、注目される斎宮である。

(35)榎村寛之前掲（2）一五〇頁

(36)榎村寛之前掲（2）一六三頁

(37)仏教を忌む斎宮を罪深いものとする意識は、『源氏物語』にある六条御息所の霊が語った言葉「斎宮におはしましころほひの御罪」（若菜下　二三七頁）にうかがうことができる。また、実在の斎宮が退下後に仏道修行に勤しんだ例も多い。

(38)保立道久「平安時代の王統と血」（『天皇制』河出書房新書・一九九〇）六六頁

(39)河内祥輔前掲　二二七頁―二二九頁

(40)宇多は仁明皇孫を、醍醐は宇多皇女を、朱雀は醍醐皇女・醍醐皇女・醍醐皇孫を、村上は醍醐皇女・醍醐皇孫・皇女をそれぞれ斎宮に立てている。

(41)河内祥輔前掲　二七九頁―二八〇頁

(42)勝亦志織前掲　一九五頁

(43)長谷川政春「『狭衣物語』に浮上する神―「天照神」「賀茂神」―」（『国文学解釈と鑑賞』第五七巻十二号・一九九二年）八四頁

(44)狭衣即位がどのように考えられたかの一例として、『無名草子』には「何事よりも何事よりも、大将の、帝になられたること、返す返す見苦しくあさましきことなり。（中略）帝の御子にてもなし。孫王にて、父大臣の世より姓たまはりたる人の、いとあさましきことなり。」（二二三頁―二二四頁）という記述が見られる。

(45)長谷川政春前掲　八二頁

(46)「殿の上の御はらからの前斎宮、右の大殿にあはせたてまつらせたまはんとすと聞えしことも、みな聞え止みにたり。」（巻第三十六・根あはせ　三六五頁）、「まことや右の大殿はつひに殿の斎宮におはしましそめぬ。ねびさせたまへれど、心ざし浅からでおはします。」（同　三七五頁）

(47)『後拾遺和歌集』巻第二十・雑六・神祇の最初に配された和歌

は嫄子女王のものであるが、その詞書には、「長元四年六月十七日に、伊勢の斎宮の内の宮にまいりて侍りけるに、にはかに雨降り、風吹きて、斎宮みづから託宣して祭主輔親を召しておほやけの御事など仰せられけるついでに、たび〳〵御酒めして、かはらけたまはすとてよませたまへる」（『新日本古典文学大系8後拾遺和歌集』三七七頁）とあり、託宣のことがうかがえる。

(48)田中貴子前掲　九五頁

(49)『日本紀略』後篇十四・後一条天皇・長元四年八月五日条には、「五日庚辰。召二問祭主大中臣輔親去六月伊勢荒祭宮託宣之趣一。申云。斎宮頭藤原相通妻宅内作二大神宮寶殿一。詐二假神威一。誑二惑愚民一。其罪已重。早可二配流一者。」（『新訂増補国史大系11日本紀略後篇・百練抄』二八〇頁）と見える。

(50)坂本和子「古代物語と伊勢斎宮」（『国学院雑誌』第七一巻第一号・一九七〇）三四頁～三五頁

(51)秋好の伊勢下向の折の発遣儀礼の場面には、「かうやうに、例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて、いとよう見たてまつりつべかりしいはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ、世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし、など思す。（中略）斎宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしほたれさせたまひぬ。」（賢木　九二頁～九三頁）とあり、源氏・朱雀帝それぞれが、秋好に興味を抱く記述が見られることから、秋好を、源氏や朱雀帝世代の人物と考えることに差し支えはないだろう。

(52)『新編日本古典文学全集21源氏物語②』三八五頁・頭注（一六）

(53)巻第十二が、「三条院、御心地なほおどろおどろしうおはしますを、殿も上もいみじく思し嘆かせたまふとぞ。」（巻第十二・たまのむらぎく　九二頁）と、三条院の病悩記事で閉じられることも象徴的であろう。

(54)天皇の践祚・受禅、崩御・譲位場所は、『皇居行幸年表』（詫間直樹・続群書類従完成会・一九九七）によった。

(55)『小右記』長和四年八月十九日条には「主上被仰云、近日相府頻催譲位事、然而不帰入大裏不可有其事」（東京大学史料編纂所古記録フルテキストデータベース）と見え、譲位を促す道長に対して内裏還御がならない限り譲位はしないと三条天皇が言ったことが記されている。

(56)高橋由記前掲　一二八頁

(57)頼通の「この宮の御髪の有様は知らず、けだかう恥づかしげにやむごとなからん方は、えしもや勝らせたまはざらんと、御心の中に思されて」（巻第十二・たまのむらぎく　五六頁）との考えが記述される。

【使用テキスト】

以下の作品の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。『栄花物語』『日本書紀』『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』『大鏡』『無名草子』『十訓抄』。また、『斎宮女御集』『敦忠集』『物語二百番歌合』の引用は、『新編国歌大観』（角川書店）による。その他の使用テキストについては、引用末尾に示す通りである。

（いのうえ・まい　本学卒業生）